



# 寺報

2022年（令和4年）

No. 314

# 1月号

Zenkyo-ji monthly  
Communications Paper  
En [えん]

# 縁



## 高名なお坊さん（その1）

## 明惠上人

明惠上人は承安三年（1173）に生まれ、寛喜四年（1232）に没した。8歳で父母を失い、高雄山神護寺の文覚について出家する。東大寺で華厳を学び、勸修寺の興然から密教の伝授を受けた。建永元年（1206）後鳥羽院より梅尾の地を賜り、高山寺を開く。

明惠上人といえば、厳しい修学修行、釈迦への思慕、自然との調和、人間味あふれる逸話、夢幻に彩られた伝説、書き留められた夢などが想起される。若き日には、求道の思いから右耳を切り落とし、釈尊への恋慕から二度にわたってインド行きを企んだ。

明惠上人樹上坐禅像の中では、一人静かに木の上で坐禅を組んでいて、周りには小鳥とリスがいるだけです。聞こえてくるのは風の音と木々の葉ずれの音だけ。まるで深山でひとり孤独に修行をしているかのようですが、実はこれは高山寺の裏山での情景を描いたものです。明惠上人は弟子に囲まれた生活の中でも、隠遁への憧れを持ち続けていました。しかし、高山寺を切り盛りする明惠上人にとてそれは実現困難な願いでした。明惠上人を慕って数多くの人々が訪れたのです。後鳥羽院や九条家などの貴顕たち、貞慶や栄西ら僧侶たち。

明惠上人は夢の記録をつけ続けたことでも有名です。18歳の頃からつけ始め60歳で亡くなる2年前までの夢の記録「夢記」が残っています。夢の内容は多岐にわたっており、明惠上人の生活、思想、願望の反映あります。



明惠上人



国宝 明惠上人樹上坐禪像

幸せだと思つているとすれば、それは例え一時的に実現したとしても、必ず崩れさつてしまふのが常であります。求不得苦から逃れるには、足るを知ることが大切です。どうしたら良いか、それは身近な人や、全ての事象を当たり前と思わず、感謝することです。

約二千五百年前、お釈迦様が三十五歳で仏のさとりを開かれた、その第一声は「人生は苦なり」でした。  
人生の苦しみを「四苦・生苦・老苦・病苦・死苦、それに前述の四つの「苦」を加えて「四苦八苦」と説かれています。「求不得苦」は、求めて得られない苦しみを表す言葉です。目標を達成してもまた次の目標が必要になる。欲しいものを手に入れても次が欲しくなる。このもつともつとと求めて止まない苦しみを、餓鬼の苦しみといいます。  
欲しいものがあれば、それを手に入れるに躍起になり、無理を通して、他を押しのけ、自分の思うようにならなければ、腹を立て、ねたみ、心が静まることはありません。  
自分の思うようになる、自分の願望が満たされることが



報恩講（令和3年12月2日）

## 住職レター

続くシリーズです。

令和四年版の善教寺法要案内パンフレット、ようやく完成しました。タイトルは「求不得苦（ぐふとつく）」。令和二年版の「愛別離苦」、令和三年版の「怨憎会苦」、そして令和五年版の「五陰盛苦」へと